

---

# 龍の息子の放浪記

初心者の奴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

龍の息子の放浪記

### 【NZコード】

N3818BA

### 【作者名】

初心者の奴

### 【あらすじ】

龍神によって作られた主人公

素質はあっても経験が足りないということです

次期龍神を目指すため異世界へ行き 知識を育む

この作品は初めて投稿するものです

主人公最強（予定）などがあります

## 第一話 異世界に降りる（前書き）

コレは、『上海アリス幻樂団』様による東方Projectシリーズの一次創作・幻想入り物です

原作無視などの可能性が無いとは限りませんので

それなどが不快に感じる方は戻つていただくのがいいかと  
では どうぞ

## 第一話 異世界に降りる

「で、話つてなんだよ親父  
「まあ そう急かすな 今話す」  
「はいはい・・・」

今俺は親父 もとい神様 いや龍神か？まあ最高神に呼び出された呼び出すというより 連れてくるのほうが合っている気がするがま、それでもしないと他の奴と話す事ができないのだが  
「「はなにかと不思議空間で 上下左右真っ白  
他の奴と話したいならば ソイツの所に行くか 連れてくるかの2択なのだ

普通に歩いてたら 絶対に見つからないし  
というか上下左右真っ白な事から考えると 歩いているのが怪しい慣れてしまつたが

「ワシがお前を作り出した理由は分かつているな？」  
「ああ、簡単に言うと次期龍神候補みたいなもんだろ  
「まあ そういう事だ」

親父は龍神というだけあって でかい まずでかい  
鱗一枚が俺と同じ大きさだし まつ 眩しつ 輝いてやがる 流石  
龍神  
ちなみに親父は口で喋っていない 念話とでもいうのか テレパシーとかそんなモノらしい  
俺は口だぞ？ 人型だから

「その事なんだが・・・」  
「・・・？」

「お前には素質がある しかし経験が足りない」

なんか うつ ときた

面と向かって言わるとキツイかもしれん

「経験・・・どこいつ?..」

と 聞き返す

「お前は他者との触れ合いでしていなにからなワシジ以外と  
まあ他にもいろいろあるがな」

「で? どひじひと?..」

「最近新しくできた異世界があつてな  
そこにお前を送り込もうと思つ」

「へえ .. .」

「しかしちょっと問題があつてな」

「ん?」

「その世界はいろいろと危険だ」

「え?」

ふう と親父は息をはくと

「まあ そんな危険な所にお前を投げ込むつてこいつケコ  
いかんので 能力を付けてさせてもうつ  
あと武器も渡しておう」

「あ・・・ああ 助かる」

「ああ ちなみにもう能力の付くは終わったぞ

危険な世界に丸腰で行くのは嫌だしな・・・

早ツ いつの間に・・・

「あとコレだ」

スツ と 剣が俺の前に現れる

「触つていいか?」

「ああ お前に渡すつもりだしな」

と 剣を持つてみる

「軽い・・・?」

軽いのだ 異常なほど

「それはな お前が人間状態の時に出される力を吸うと  
鋭さや重さや強度が変わるんだ」

「・・・ん? 人間状態つて 今の俺以外にもなんか変わったりするのか?」

ああ そうだった と親父はため息交じりで言つ

「今のお前は人間状態 そしてもう一つの状態が龍化 まあ龍化といつても

尻尾が生える程度だ といつても人間状態時に使う力と龍化時に使う力は別物だがな」

なんじやそりや 初耳だぞ

「まあ すぐなれるだろ 尻尾が生える想像でもしてみる」

「いやな想像だなソレ・・・」

と まあ軽く想像してみると

「うう・・・?」

シユルツ と

一本の細長く 先っぽがものすごく鋭い尻尾がでてきた

その瞬間、剣の重さが変わる

「なるほど・・・ 確かに違う感じだ」

「軽く説明をしておう」

いきなり親父が喋り始める

「人間は一般的に靈力と呼ばれるモノが使われる  
お前が人間状態時ならば靈力が使える  
その剣に吸われた力はおそらく靈力だろう  
そしてもう一つ その龍化時なら神力というモノが使える  
正直言つてこの神力を使うには色々と面倒なものがあるんだが  
お前は例外だ 生物が普通に生きているだけで お前に神力が入つ  
てくる」

「ちょっと待て 神力ってのは他の奴から貰うモノなのか?」

「えーとな・・・他の世界から見る限り 信仰といつものが多い  
れば多いほど

その神の持つ力は強いんだ」

「けど俺は生物が生きてるだけでその力を貰えると なんで?」

率直な疑問を聞くと

「やつや ワシがこの世界全部作ったから」

親父は規格外だった

「あとコレ持つて行け」

上からヒロー と長方形の箱が落ちてくる

「おっ・・・と」

パシッ と受け取る

その箱を開けてみると

「これって・・・葉巻?」

「そうだ葉巻だ」

別世界で見た事がある

火付けて吸う奴だ

「ちなみにこの葉巻は特別製でな・・・  
有害分をすべて取り除き  
少し使つただけで落ち着けるという優れものだ!」

良く分からんが 素晴らしいよつだ

「そういうやと思つたんだけど なんで俺つて人型なんだ?」

「葉巻はスルーか・・・まあ人型なら応用が効くかと思ってな  
不満か?」

「いや 大丈夫だ もう慣れたら 今更変えたってな・・・」

「今更? お前 いくつになる?」

「地球にいると仮定したら エーと・・・軽く9846歳くらいだ  
ったかな」

「なんだ もうすぐで一万じゃないか」

「だなあ」

今思つと ここの真っ白な空間でよくそんだけの時間生きてきたものだ

「それじゃ そろそろ送るぞ 剣はいいか?葉巻はいいか?」

「まあ 大丈夫だ」

「では 送るぞ」

すると親父は黙り込む

10秒後、俺を囲つように文字が現れる

「では 送るぞ 幸運を祈る」

「ああ んじゃ行つてくる」

親父に向かつて軽く手を振る

瞬きすると もう親父は目の前にいなかつた

「ん・・・」

目を開けると 別世界

湖があり 森があり 地面があり 空がある

腰の剣 葉巻をチェックすると

「よし 行ぐか」

俺は 新しい世界への第一歩を踏み出した

## 第一話 異世界に降りる（後書き）

原作キャラでません すみません  
意見 感想 指摘 待っています  
では

## 第一話 は？怪物？ふやけんな（前書き）

こんにちわ 一応自己紹介を 初心者の奴と申します  
名前通り初心者なワケで、不可解な点やハア？となる部分があるかもしれません まあ駄文ってヤツです  
駄文は駄文でも何回か書いてればマシになるだらうと願つて  
書き続けようと思います

注意事項は以前と同じ では どうぞ

## 第一話 は？怪物？ふぞけんな

「そらっ」

「グベツ」

ドサツと音を立てて倒れる化け物  
化け物・・・まあ狼みたいな奴だつた  
一応あれから100年ぐらいたつて 力の使い方とかマスターした  
つもりでいる

神力を手の平に集め 圧縮し形を整える  
形は 槍 やはり飛び道具は必要だろうと思ひ 槍の形をよく使つ  
ている  
え？もう100年たつたのかつて？  
それまでの話してもいいけど

ただ毎日毎日座つてるぐらいだよ？  
しかもそのころまだ植物以外に動物がいなかつたし  
最近になつてこういう襲つてくる化け物が誕生し始めたんだ  
まあ 敵じやないが

「あー・・・ きつたねえ」

さつきの狼の化け物を槍の形をした神力で貫いたら  
結構血が出て かかつてしまつた

「服はいいけど・・・顔についたのは落としたいな」

ベチャ と頬についた血を拭う

「 やついや湖つてどこにあつたっけか・・・

ずっと前、大きな湖があつたんだが どうにあつたか忘れてしました

ガサツと 草を踏む音、  
忘れてた この森だつたんだ

周りには木 木 木

ちなみに やつきの音は俺ではない

別の何かが・・・いる?

おやいへ やつき殺した化け物の血の匂いでも嗅いできたのだらう

「 やつやどりから離れるとするか・・・」

と 俺がこの場を去るのと足を踏み出した瞬間

「 グオオオオツ!」

目の前の木の後から見事なステップを踏んで 俺に飛びつこうとしてくる化け物、ちなみにこれも狼

俺はそれを 殴り飛ばす

「 グギヤツ!」

近くにあつた木に当たり 気絶

何故避けなかつたかつて？ 面倒だからだよ

「やつぱ湖探して血落とすか・・・」

俺はその場から全速力で脱出した

「ふいー・・・」

「い」は湖、やつぱ水はいこな 生き返る

「わい・・・服どうすつかな」

問題は 服

顔や腕など素肌についたものすぐ洗い流せるのでいいんだが  
服はそもそもいかない  
着替えがあつたらいいんだが そんなモノは今は無い

「うーん・・・ どうすつかな」

困った困った

俺の能力にそんな力があつたらよかつたのに・・・

あ、そりいえば能力を使えるようになつたんだよな

この尻尾を出している状態だと 火水風土雷を操る事ができるらしい  
神力を使えば それを元に生み出す事も可能

人間状態だと奪う、複製する能力のようだ

ちなみにこの能力は俺が使う相手に触れていないとダメのようだ  
試してみた結果、血でも可能だった

触れているというより 体のどこか、もしくは体液が付けば使える  
らしい

ズシン ズシン ズシン

・・・何だ？ すぐえでかそうな奴がきそうな気がする

「グオオオオオオオオオオオオオオ！」

「うおおおおおおーーー？」

ものすぐえ力振りまきながら現れた四本足の・・・化け物  
なんだコイツ・・・でけえ しかもこいらへんじゃ見なかつたぞ  
んなヤツ

すると四本足の化け物はこっちを向き・・・ こっちを向き・・・?  
突進してきた

「畜生！予想通りかよッ！」

俺はその場から思いつきり横へ飛び 化け物の突進を避けた

ズガガガガガガ と音をたて その化け物は速度を落とす

しかし なんだコイツ どつかで見た事あるような・・・  
そうだ アイツだ なんかの本に書いてあつた・・・えーと・・・

名前は・・・

「グオオオオオオオオオオオオオオ！」

突進

突進

あまりにも直線的すぎるため 避けるのは苦じやない

名前・・・名前・・・ そうだ ベヒモスだ  
どつかの世界の旧約聖書とやらで、陸に住む巨大な怪物・・・だつ  
たな  
あの内容では性格は温厚だつたはず・・・

「グオオオオオオオオオオオオ！」

だつた・・・はず・・・

今言える事は 田の前にいる化け・・・怪物は敵、倒すべき存在だ

「よし 行くぞ」

俺は尻尾を出し 神力を手の平に集め 槍の形を作る

「そもそもつてこの上に 神力で生み出した炎を纏わせて・・・」

槍を包むように燃える炎 名づけて……

「神槍『神火不知火』」

我ながら ふざけた名前だと思つ  
けど 威力は保障する！

「喰らうとけッ！」

俺はその槍を思い切り投げつける

その槍は相手に動く隙も与えず ベヒモスの頭を貫く  
ズウウウウン……と 鳴き声も上げずに地へ倒れる  
頭からは大量の血が流れ出ている

しかし貫くとはな…… そんで即死

俺は新しい技の威力に気分が高揚していた

「ま、せっかく倒したし コイツの持つてる力頂きましょうかね」

俺は人間状態になり 奪う能力でベヒモスの亡骸から力を盗る

「ふうん…… 結構力持つてたんだな……」

俺は力をすべて奪うと 他に何かいか探してみる事にした

「イヤイヤイヤイヤ…」

空には鳥 うん 鳥 鳥なんだが…

これまだデカイ そしてそいらへんのヤツと比べたら全く違う力を  
持つてる

俺は今、近くにあつた山を駆け上り  
その鳥に近づこうとする

と その鳥は 僕に気付き 突っ込んできた 何故来るんだよ…  
これまた結構な力を持つてる怪物 サッキのをベヒモスとするなら  
コイツはジズだろ

「空か… 一発で殺れるといいんだが…」

正直不知火を撃つのは結構つらい

神力を圧縮し 槍の形にする ここまでは慣れたんだが  
その上に炎を纏わせ威力を上げる というのがとても難しい  
少し力の調節を間違えると炎が消えたりする

「これもまた修行か・・・」

さっきの相手はベヒモスで 動きが多少遅かったので狙いやすかつたのだが  
今回は空を飛ぶ相手 不知火の速度も中々のものなのだが これを相手に撃つたとしても  
避けられるというのが分かる

と、いうワケで

神力で槍を生成 その周りに雷を纏わせる  
雷の速さを活用しようと考えた  
またその上に炎を纏わせれば 速度ともに威力の問題も解決なのだが  
これまた調整が難しい  
タダでさえ 一つ纏わせるだけで精一杯だというのに 二つも といふのはキツイ

「ま、そこらへんは後でどうにかしよう」

槍の準備は完了、あとは当てるか否か だ

ジズはまるで俺を遊ぶかのように空中飛行を楽しんでいる

畜生・・・俺は飛べないってのによ・・・！

俺は狙いを定め 放つ

バシュウ！ と音をたてて風を切り裂き音を乗り越え標的へと突き進む

グサッ と 見事に首を貫通 あの速さにはジズさえも避けられなかつたようだ

ジズは地面にドスンと音をたて落ちた といつか落としてやつた  
ジズの亡骸の近くまで行き 人間状態になり ベヒモスと同じよう  
に力を頂く

フム これまた大量大量

さて 一匹の怪物を潰したワケだが この順序で行くとものすゞぐく  
面倒くさいものが待つていて

陸のベヒモス 空のジズ そして最後に海のレビューアタン

俺はどうちかつツーとリヴァイアサンと呼ぶので そつちで呼ぶこ  
とにする

ベヒモスは最高の生物 そしてリヴァイアサンは最強の生物と呼ば  
れています

ということは ベヒモス ジズのように一筋縄でいかない可能性が大  
きな気がないだろう

「あー・・・どうすっかなあ 尻尾一本・・・いや3本全力で一氣

に・・・ うーん

ちなみに100年生きていて分かつた事だが  
尻尾が増えるたび力が増えるらしい まあ俺にとつては力が増える  
というより制御みたいなモノだが  
だって 神力って自分じゃ作れないし  
まあ 僕は尻尾を増やすと 元あつた神力を開放 制御をどんどん  
解していくつて感じ

と 気付ければ海

結構綺麗な浜辺だなー と海を眺めていたら・・・

バツシャアア

海から龍がでてきた 体の全体像は下が海に入っているので分から  
ないが 十分でかい

「 - - - - - ! ! !」

すっげえ高い竜、これがコイツの鳴き声か！

するとその海の龍 おそらくコイツがリヴァイアサンであるうモノが

口から水球をはいてきた

しかも「丁寧に力を織り込んだ状態で

「ちくしょう！」

俺はその場から思いつきり離れる

バシャツ！

その水球がぶち当たつた地面は小さなクレーターが出来ていた

「おおう 怖い怖い

ふざけているようだが 本心である

「仕方ない 全力出すか・・・

俺は尻尾というなの制御をすべてはずす ちなみに俺の最大は3本

「よし・・・ やるか」

俺は靈力に呼応する剣を構える

ちなみに龍化する前靈力をたっぷり注ぎ込んだので 軽いし 鋭い  
し 硬い

龍の息子と 最強の怪物の戦いの火蓋が斬つて落とされた

## 第一話 は？怪物？ふやけんな（後書き）

はい ここまでです  
全然進みません ごめんなさい  
意見 指摘 感想などくれたら嬉しいです  
そういうや主人公の名前だしてねえな・・・  
ではでは

## VS最強の怪物リヴァイアサン（前書き）

こんにちわ 初心者の奴です  
安定の駄文ですが ここまできたなら読んじゃってほしい  
頼みます では どうぞ

VS最強の怪物リヴァーアイアサン

「アリシ一郎？」

- - - - -

水球 水球 水球

俺は意を決し  
金を構える

に、おできたふ迷はれなし  
なふ！

目の前は遡る水球 僕はそれを見一め間合いを砕かめる

今たゞ

剣を靴から抜きそのまま水球を転る

ピシャツ

見事に水球は二つに斬る事ができた  
俺の左右に切り分けられた水  
球が落ちる

威力は少なく軽く地面をへこませ  
斬つたせいで速度が落ちたのか

バシヤツ

る程度だった

いや・・・へこませるつてのもかなりの威力だな・・・

そして俺はリヴァイアサンへと目を向ける

中々の威圧感 しかし俺の親父には敵わない

どうする このまま体力を削りあっても相手の力は不明、俺もかなりの体力を持つているが  
アイツのほうが体力が多いという可能性も無いわけではない

なら サッセとケリつけたほうがいいか

「神槍」

俺の右手に神力で作られた槍が生成される

「神槍を神力で包め そして神力を炎に変換」

ボウツと 荒々しい炎が槍を包む

「神槍を左手に生成 そして神力で包め その神力を雷に変換」

バチバチッと 音をたてながら雷が槍に付く

正直 一つ上乗せが無理なら 一個づつと思ったが 案外できるもんだな

「・・・ツー?」

なんだ この感じ

まるで槍に引き寄せられるような・・・ツ！

「ハアツ ハアツ・・・ な・・・ なんだ・・・?」

なにかが槍に吸われた感じがする・・・ なんか眩暈が・・・ お  
つと まだ戦闘中気は抜けない

俺はリヴィア イアサンをじっと見る

するとリヴィア イアサンは口を開じた ・・ なんだ?

その瞬間口の中で膨大な力が溜められていた

「おいおい・・・ どんだけ力練りこむんだよ・・・」

その力の膨大さはさつきの水球とは比べ物にならないほどものだ  
った

くつそ・・・ アイツはアイツで力溜めてるし

俺の攻撃はおそらくあの硬い鱗で弾き返されて終わりだ  
どうすりやいい・・・

アイツは今口に力を溜めてるし・・・ ・・ ん?

そうか口だ！ アイツが攻撃した瞬間口の中に投げ込めばいい！

今、アイツは口の中で力を練りこんでいる しかも閉じて

おそらくあれだけの力のものを吐き出したあと すぐ口を閉める事  
はできないだろう

多少なクールダウン的なものは必要なはず その瞬間を狙う！

しかし、あの攻撃の威力は未知数 撃つ前に俺が吹っ飛ばされるかもしれん・・・

リヴィア・アイアサンがこちらを向いた・・・そろそろくる・・・

「 - - - - - ! ! ! ! ! !」

ドンッ と口が開かれ攻撃が放たれる

「今ツ！-！-！」

俺は一つの槍を思いつきり口えと投げ込む ちゃんと相手の攻撃の軌道線上とは別のところからな？

俺は投げたあと その場から右へ思いつきり跳躍した

「逃げ切れるか・・・！？」

ズドオオオオオオオオン

大きな爆発音が後のほうで聞こえる

俺は爆発さえ喰らわなかつたが 爆風に耐え切れず 吹っ飛ばされた

「くわいわいわいわいシー！」

木々を思いつきりなき倒しながら打つ飛ぶ俺

最後にだけおもに思いつきりぶつかってやつと止まつた

「ぐう・・・ 神力で身体強化しといてよかつた・・・ あんま痛くねえ」

俺は背中に異常が無い事を確かめると わきをまでの戦場に跳んで  
いつた

悪魔でも跳んでいた だ 俺は飛べないからな

まつさら

ただ一回 まつさら

近くにあつた森 岩 地面 全部吹つ飛んでやがる

おかげで海が広がつた まあ どうでもいいが

それよりも結果だ 結果が大事

俺はリヴィア・アイサンを探した

すると元々浜辺だったトコロに力無く横たわっていた

念のため警戒しつつ近づいて行く

「・・・フム 完璧に気絶してゐるな・・・  
大して怪我してなさそうだな  
畜生俺の大技くらつて平氣命に別状が無いとか・・・怖いもんだな・  
・」

一応尻尾フル（3本）状態で本氣技したら後々怖いので一本くらいの威力に弱めたのだが  
こうも致命傷が無いとなると正直悲しいかな・・・  
さて・・・どうすつかなあ・・・

このまま奪つ能力で力頂いてもいいんだがなあ・・・

こんなに強い奴にあつた事ないし

俺一人じゃなんかアレだし 慣れてるけど

・・・?

おかしい

軽くリヴィア・アイサンに触れてみたのだが

何かがおかしい ものすごく弱つて 何故だ・・・? 身体に  
全く外傷など見られない

しかも口の中を覗いても、俺の攻撃は大して効いていなかつた感じだ

「……くつそ　どうなつてんだ！」

コツツ

「いてつ」

なんか降ってきた

本のようだ 手にとつて開いてみる

目次

P 4 結界の作り方

P 19 結界の作り方 応用編

P 5 6 札の作り方

P 7 1 札の作り方 応用編

・・・つて！ なんだコレ！

こんな事してる暇じゃ・・・ん？

状態視察・・・？ これならコイツの今の状態がわかるかも・・・

ええっと・・・なになに？

まずP 780に付録されている札を取り  
そこに自分の力を注ぎ込み  
相手の額に置く

フム それで？

札越しに手をおき 多少待つ

この時、札に書かれている文字が消えます

状態視察を終えるとまた浮き上がります  
その浮き上がった文字に書いてある事が 対象の相手の状態です  
注意これは人型のみに有効

「マジかよおおおおおおッ！！」

「ここまで読ませておいてこのオチか！ ふざけんな！ 先に書け！」

・・・ん？

P 1983 生物に別の生物の形を被せる方法

・・・ いける いれはいけるはず

「よし やるか」

俺はP2056に付録されている札をとり

自分の親指の腹を噛み切り

そこから出る血で文字を書く

そして真ん中に○と書き

その○の中の人と書く

「よし そんでこれを使いたい相手の額に置いて・・・

その人という文字を隠すように手を置いて 自分の力を込める!」

すると リヴィア・イアンの身体が青白く光り、人の形へとどんどん

変わっていく

やつた 成功だ！ と俺は思った その時

「うう・・・！」

同じ感じ わつき槍を生成した時と同じ感じだ

眩暈がする 意識が飛びそうだ

俺はついついその場で膝をついてしまった

「ぐつ・・・う・・・ はあ・・・治まつたか・・・」

はあ・・・ 一体なんなんだこれは・・・

「・・・よし もう動けるな つたぐ・・・」

と 俺はリヴァイアサンだったものに目を向けて

ちゃんと人の形をとっている・・・ ふう よかつた・・・

ちなみに せめて言葉を喋れるようにと 札の中の呪文に書き加えておいた

流石応用編 助かりました

近づいてみると 性別は女性のようだ 水色の長髪 顔は整っていて なんつか 凛々しい  
という感じ

「・・・ついで落ち着いてる場合じゅうねえ 状態見なことー。」

流石に水に浸かってたままではまずいので 場所を変える

入り口は細く長く そして奥まで進むと広い  
洞窟、少し前俺が無理やり打つ壊して作った

ど真ん中に俺の神力の塊を置いてある

それから少しづつ神力が漏れ出すように調整し

漏れ出した神力を炎に変換している

近くで寝てる女性 もといリヴィア・アイアサン 意思疎通できるように  
言葉を入れ込んだはずだが・・・ 効いてくれますよ！」

先ほど あの本に書いてた状態視察を使ってみたら 今は全く問題  
無し

なんであんなに弱っていたか疑問だったのを 応用編に書いてある  
相手に起こった身体の異変を全部調べる といいつすげえやり方で調  
べた結果

俺の使った神槍によつて肉体ではなく精神、心を削つたらしい

何故こんな事になつたのか ついでに俺の身体の異変も調べてみた  
そしたら

神槍に俺の魂が吸われたらしい なんて恐ろしい！ 今の俺は大丈  
夫なのか！？

と、滅茶苦茶慌てながら調べたのだが 心は順調に回復していく  
今は全快だという よかつた・・・

ちなみに リヴィア・アイアサンの魂を削つて 大丈夫なのか という事

だが

その削った部分に入り込むようにして 僕の心がスルリと入つたら  
しい

おそらく人型にしたときだろう 僕の心は俺の心なので やはりリ  
ンクしている

すなわち 僕の心が相手にある その相手に俺の心は読まれてしま  
うと同時に

相手の心も読めてしまうという事

ああ なんという事でしょう

「ん・・・むう・・・」

・・・と 起きたかな?

「おーい?」

「へ?・・・ あつ・・・ 貴方はッ!」

俺の姿を確認すると同時に戦闘モードへと移行するリヴァイアサン  
やめてくれ 怖いから

「え・・・？　ど・・・どうこいつ事だ？貴方の声が私の中で・・・え？え？」

まあ・・・　こうなるわな

「しつ 知つているんですね！　何故こんな事になつてているんですか！」

と、思いつきり指を刺して言つてくるリヴィア・イアサン　なんか『ズビッシュ』って効果音がついてきてる

「何言つてゐんですか　あとリ、ヴァイアサンつてのはなんです？」

「あー　そつか　本人自体は知つてなくて普通かもな・・・まあ順をおつて話す　危害は加えない　まず座れ　そして聞け」

「は・・・はあ・・・」

龍説明中・・・

「それはつまり私の命を貴方が握つていて　と？」

「ま、それに近いかな」

俺の心がコイツの心から抜ければ また心は削られた状態となり  
弱る

ちなみに俺は規格外 自然治癒するよつだ ありがたや

「・・・私はどうすれば・・・」

〇〇〇 という状態で落ち込むリヴィア イアサン

「選択肢は一つ 僕と離れ 心が削れた状態でそのまま死ぬか  
それとも俺に忠誠を誓い 一生付いてくるか」

ま流石に迷うだらうな・・・ 僕と離れるとかいつても無理矢理  
連れてくけど

するとリヴィア イアサンは

「分かりました 貴方に忠誠を誓います どちらにしろ私は貴方に  
負けました 好きにしてください」

「えつ?」

「何回も言わせないでください 忠誠を誓います 私は貴方につい  
ていく」

えつ・・・あれ? 潔すぎる・・・まあ いいか

俺は思わず笑っていた なんか久しぶりに笑った気がする

「なつ! ?何をいきなり笑っているんです! ?」

「あ？ ああ いや なんか さ・・・」

「なんか？」

「嬉しくって さ あはは」

なんか 嬉しかった

今まで一人だつたつて事を考へると 尚更

俺としては一人でも平氣つて思つてたけど それは上つ面だけだつたみたいだ

「何が・・・嬉しいんです？」

「誰かと一緒にいれること だな 長年生きてきたけど ずっと一  
人だつたし」

するとリヴィア サンは は？ といつ顔をして

「長年？ 貴方は一体どのくらい生きているんですか？」

聞いてきた

「えーとな・・・今9946歳かな・・・もつそろそろ9947  
歳かも」

「えつ！？」

めりひやビックリしてゐ やひまでもビックリするか・・・?

「私はまだ〇〇年程度しか生きていないのに・・・」

「セリヤセリヤ ここの世界で生きてから〇〇年くらいにしかたつていし」

「ハアー!?

リヴァイアサンが意味分からんーって顔で言いやがった まあ 軽く説明してやるか

龍説明中

「で、親父は神だと」

「セリヤセリヤ」と

「へえ・・・」

なんか疑い半分吃驚半分つて感じだな・・・

「あのセー」

「なんですか?」

「リヴァイアサンって長いから 今度からリヴァって呼ぶけどいいよな?」

「いいんじゃないですか? 私は元の名前すら知りませんし」

そうだったな ハハ

「で、一応お前は俺の下僕・・・いや違う従者って感じのものになつてもう その事でだな」

「その事で?」

「ひひひひ 一人つきりの時は砕けた喋り方でいいんだが  
他の意思疎通のできる生物とかが誕生した時は上下関係をハッキリ  
させるために  
敬語・・・いや敬語はもうできてるしいか それ以外は命令に従  
つてくれればいいや」

「成程、ならなんと呼びます? 御主人様と?」

「やめてくれ 虫唾が走る せめて名前で」

「いえ・・・私は貴方の名前を知りませんので・・・」

「あ そういうやうだったな 僕は隆司リョウジだ」

「そうですか なら隆司・・・様?」

「やうやくさんはまかせる」

「分かりました」

「わひとー。」

「わひとー。」

「寝る」

「・・・あ ハイ おやすみなさい」

俺がねつこひがるとリヴィアは周囲を警戒する 周囲つていつよつ入り口を警戒してゐる

「大丈夫 わつき見た本で外に探知結界と入り口に遮断結界張つてあるから そこらへんの奴等は絶対に入つてこれない」

「凄いですね・・・わつきのものをすぐ活用できるとは」

「無駄に長く生きてないよ といつかまず俺寝なくていいのになアハハ まあ寝るよ オヤスミ」

サイド リ、ヴァ

不思議な人？まあ神様だ

戦っている最中はとても恐ろしい程大きい力を持つていたのに

素は結構温厚なようだ

・・・温厚ではないか・・・ あの一つの選択を迫られた時 心の  
声では

『俺と離れるとかいっても無理矢理連れてくけど』

思いつきり聞こえていた まあ私としても死ぬのは嫌なので 忠誠  
を誓つだらつ

・・・やはり 身体は疲れてるみたいだ 私も休ませていただこう・

「おやすみなさい 隆司様」

私はそう言つと 横になり 目を閉じた

VS最強の怪物リヴィア・イアサン（後書き）

お疲れ様です  
やつと次へ進めそうです  
新しい仲間？リヴィア・イアサン まあノリですねコレ  
意見 指摘 感想 お待ちしております  
誤字、脱字も教えていただけると助かります  
あとアドバイスも  
では おやすみなさい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3818ba/>

---

龍の息子の放浪記

2012年1月10日20時57分発行